

通信

いわて地域総研



新年明けましておめでとうございます

目次

●表紙写真		1P
●2025年の年頭にあって		2P
●連続講座「岩手の再生」第1回連続講座		3P～5P
コーディネーター 岩手地域総合研究所理事長	井上博夫さん	
シンポジスト 岩手医科大学附属内丸メディカルセンター長	下沖 収さん	
岩手県医療局経営管理課 企画予算担当課長	佐藤宏昭さん	
久慈地域医療を守る会代表	葺山弘子さん	
奥州市水沢 三児の母	佐藤由衣さん	
●連続講座「岩手の再生」第2回連続講座		5P～8P
コーディネーター 岩手県立大学高等教育推進センター准教授	山沢智樹さん	
シンポジスト 一般社団法人虹パーク代表理事	熊谷貴典さん	
岩手県青少年自立センター「ボランの広場」相談スタッフ	高橋淑子さん	
水沢子どもの居場所実行委員会 代表	大村千恵さん	

NPO法人

岩手地域総合研究所

岩手県盛岡市中央通二丁目8番21号 Mホール

Tel・Fax:019-624-6715

メール:i-chiikisouken@salsal.ocn.ne.jp

岩手地域総合研究所 2024 年度
連続講座「岩手の再生」
「不安の根源を探る」

第 1 回講座

何処でも安心して医療を受けられるために
〜地域医療の今とこれから〜

昨年 12 月 8 日、岩手大学教育学部 E23 講義室で開催されたシンポジウムの概要をお知らせします。

今回は報告者としては 4 名の方が報告しました。

「地域医療の今とこれから」

〜地域医療が抱える課題〜

岩手医科大学附属

内丸メデイカルセンター長

下沖 収さん



地域医療が抱える課題も変わってきました。昔、若い方が多い時代には急性期医療が重要でしたが、今は急性期医療だけではだめで、病気が治っても家に帰れない、生活できないということなので支える医療も重要です。支える医療ということでは、治らない病気、高齢者の看取りということもあります。

それから社会保障費です。一般財源の中で社会保障費だけが突出して増えてくるということです。これはもちろん対象者になる高齢者が増えたということもあるかもしれませんが、医療の進歩ということ、どうしても社会保障費が

増える方向に行かざるを得ないです。

一方で人口がどんどん減ってくる中で医療を支える人手不足、働く方々が減っていくという非常に大きな問題があります。

さらに医師の地域偏在が非常に大きな問題でこれも過去何年間も言われました。最近では診療科偏在というのでも大きな問題です。それからもつと言えば病院と診療所の偏在もあります。

2024 年 4 月からは医師の働き方改革が始まっています。やはり医療は今まで医療者のある意味献身的な努力で守られてきた部分があるのですが、それも限界があります。先ほど話した人手不足、働き手の取り合いの時代が来ますから、そういった中で医療人材を確保すると考えた時に、働き方改革は避けて通れない。それから病院経営状態の悪化です。

まずは医師の地域偏在です。偏在指標というのがありまして、岩手県は一番新しいデータで、最下位です。

私の前任地は千厩病院で在任中院長をしていました。その時にまさに地域医療崩壊の現場を目の当たりにしました。千厩病院は地域で中核的な働きをしている病院で、2015 年からの在任中は本当に忙しかった。

2000 年当時 18 人常勤医がいたのが徐々に減っていきます。初期臨床研修制度が始まり、市町村合併で千厩町が一関市と合併しました。

その後大野病院産科医逮捕事件があつて、ずっと県立病院の集約化が進んでいきます。そして私が赴任した時、2015 年の常勤医師は 6 人、2016 年には 5 人です。この条件でどうやって医療を守るんですかということですよ。

2000 年の頃は総合病院です。それだけの診療科に各科複数の医者がいてバリバリ稼いで

いた黒字病院だったんです。ところが私の時には県立病院の中で最も医師の少ない病院でした。

実は 2010 年頃から地域医療の危機ということで一関市では市を上げて地域医療を守る。特に千厩病院がやばいということで病院を守るうと市が取り組んでくださったっていました。地域の住民の方々が病院を守ろうという活動をしてくださいました。

働き方改革をしなければ医師の負担が増えます。ですから国を挙げて住民の皆さんにも協力していただきながら、働く残業時間が減る上限を決めようということです。

医療も人材が足りなくなると言われていますから財源をしっかりとつけていただかなければならないし、働きやすい職場にしていかなければなりません。地域医療の課題をざっと話させていただきました。まだまだあるんですが、これらをしっかりと解決していかないと地域の医療は守れないと思っています。

「岩手県立病院等の経営計画（2025〜2030）」について

岩手県医療局経営管理課

企画予算担当課長 佐藤宏昭さん

来年度からの大きな方針を示す次期経営計画の策定を進めております。今回最終案を取りまとめて公表したことについて、その内容についてお話しします。

まずは医療の高度・専門化です。手術支援ロボット、高精度リニアック等の高度医療機械を使った治療が標準化し、また治療に複数のスタッフが同時に関わるチーム医療というものが進展しております。結果として次世代の医師の育



成にも影響を及ぼすなど、県全体としての医療の質の低下を招きかねないという状況になってございます。

高齢者人口ですが、2030年頃までは横ばいが続きますが、生産年齢人口は減少の速度が速く、医療従事者の確保が

っそう難しくなっていくという状況にあります。圏域に居住する方が自らの圏域以外で医療を受けられている割合が多くなっています。

医師の不足については、人口10万人当たりの医師数は、増加はしておりますが依然として全国とは40人以上の乖離があるということです。全国最下位ということで引き続き医師の確保が課題になっているところと見込んでいます。

4月からスタートした県の保険医療計画は、ガンとか脳卒中といった疾患について、二次保健医療圏を超えてより攻撃的なエリアに医療を提供していく疾病・事業別医療圏という考え方が取り入れられました。

県立病院の経営ですけれども昨年度が過去最大の赤字決算となりました。今年度は診療報酬改定が行われましたけれども、賃金のベースアップが、物価の高騰に十分対応できるほど引き上げになっていないということに加えて、コロナ・物価高騰対策関係の補助金がなくなりましたが、給与と改定による給与費の増等によりまして、経営状況が悪化しております。現時点では経常利益で90億円ほど過去最大の赤字を見込まざるを得ないということがあります。

医療による環境変化、それに県立病院の危機的な経営状況を踏まえまして、次期経営計画においては機能分化、それから連携強化というも

のを大きな基本方向としてまいります。

次は職員の確保、特に医師の確保です。

奨学金による医師養成を続けまして、地域偏在、診療偏在に対応した適正な配置を目指していきます。また不足する中堅層の医師の確保を進めるべく、奨学金履行要請後の定着の促進、それから指導医の派遣要請専門研修プログラムの充実といったところも図っていきたく考えています。

配置計画は、いずれの部門につきましても、高度専門的な医療の質の向上を図っていくために専門人材の集約といったところも進めてまいりたいというふうに考えています。

今般の厳しい経営状況を踏まえまして計画の初年度、令和7年度は現実30億円程度の赤字になるんじゃないかと見込んでおりますけれども、今後機能分化それから連携強化というところで一層推進するとともに収益の強化、それから費用削減取り組みをさらに進めていくことによりまして計画の最終年度令和12年度に収支均衡まで改善させるということを目指しまして取り組んでまいりたいと考えています。

『久慈病院で診てもらいたい』という切実なねがいに応えて」

久慈地域医療を守る会代表 葦山弘子さん

昨年10月中旬に久慈市、洋野町、野田村、普代村で実施したアンケート調査の回答では、県立病院に対する調査結果では、「満足している」「どちらかと言えば満足している」が、合わせて2割ちよつとでした。一方どちらかといえば不満が合わせて7割を超えました。不満の理由として待ち時間が長いのが7割を超え、受診



できる日が限られているのは7割、診療科が少ないのが6割とどれも切実であることが窺われました。

「県立病院で不足していると思う診療科は何ですか」の問いに、産科婦人科の不足を指摘する声が半数に近く、続いて皮膚科が4割近く、耳鼻咽喉科が3割近くとなっています。

医療従事者へのメッセージは7割の方から記述が寄せられました。県立病院で見てもほしいという声が圧倒的でした。医療従事者への温かいメッセージにあふれていることが特徴です。

次に久慈病院の機能充実を求める取り組みでは、県立病院の経営計画案は、今まで県立久慈病院で受けることができた高度専門治療、がん治療などは県立中央病院でなければ受けることができなくなりそうです。住民のアンケートの願いに真つ向から反対する計画案であり、守る会では関係する機関に働きかけをしました。

久慈市議会、洋野町議会、野田村議会、普代村議会の4つの議会には請願を提出し、各議会は12月議会で審議しています。

岩手県知事、県医療局長への要請について、12月3日盛岡地区合同庁舎で達増拓也様と小原重幸医療局長に7、444人分の署名を添えて要請をしました。

知事はマニフェストで地域医療を確実に守ると言っています。

「安心して子どもが産める地域を」

奥州市水沢 三児の母 佐藤由衣さん



仕事は認定子供園で保育教諭として働いております。現在は今年の1月に北上の県立中部病院で出産をしまして、現在育児休業取得しており、10ヶ月の子どもを含めて3人の子育てをしている母親であります。

私のこれまでの出産の経験や奥州市の現状をお話したいと思います。

奥州市の県立胆沢病院にも産科が入っていたんですけれども、2007年で産婦人科の受け入れを休止してからは市内では4箇所の開業医で分娩が可能でした。

しかし2015年に一つの開業医が産科を取りやめてからの数年の間に相次いで他の開業医も産科を取りやめてしまい、2022年には市内で唯一となった開業医もお産を取りやめたことで、奥州市では施設が全くななくなってしまいました。

奥州市に分娩がなくなると行ける病院というのは北上か一ノ関まで行かないと出産することもできず、通うだけでも移動に時間がかかり妊婦にはとても負担がかかります。

奥州市は人口が10万人を超えていて、盛岡の次に人口が多い地域となっております。それぐらい人口が多いにもかかわらず産科が全くないという状況です。産婦人科と小児科は本当に医師の負担が大きいことは容易に想像が付きまします。

自分の住む地域で安心して出産して子育てをしていくためには医師がいないことには成り立ちません。医師を確保するためにも医師が働きやすい環境づくりも必要になってくると思います。医師の働き方改革への対応も含め、医療機

関の機能分担や連携を図り、地域で安心して出産できる体制を作ってほしいと願っております。
(文責：事務局)

第2回講座

子ども・若者の居場所づくりとその役割と課題

昨年12月21日に開催されたシンポジウムの概要をお知らせします。

一般社団法人虹パーク 代表理事 熊谷貴典さん

虹の学園の教育理念とカリキュラム

虹の学園の教育理念は「子どもの要求と発達段階に応じた、プロジェクト学習を通じて、生きる力を子ども自身で獲得する場所と時間をじっくりと保障します。」「異年齢での協働と食育を通して、比較や競争で子どもを追い立てず、他者理解と自立の芽を育てます。」の2つです。



カリキュラムは、午前中が調理実習で昼食を作っています。月曜の午後には、けん玉教室をやったり、中学生がシアタールームを作ったので映画を上映したりしています。2学期からは

中学生限定ですが、曜日ごとに数学、社会など科目を決めて希望者に45分間の学習時間を設けています。木曜日は様々な方に来ていただいで全員参加の講座をしています。毎月1回は弁護士佐々木良博さんの学園長講座です。

受け入れ対象は小学1年生から中学3年生です。中学校卒業後や高校在学中であっても希望

する若者は受け入れれます。高校生はボランティアスタッフとして大人と同じようにスタッフ扱いで活動してもらっています。

発達要求と存在要求

不登校の子どもたちは主体性が奪われた子どもと考えています。その子どもたちは、発達要求と存在要求が満たされていないと捉えています。虹の学園ではこの2つを充たして、子どもの元気を回復するということを目指しています。

存在要求というのは、他者との関わりの中で育まれるもので、人からあてにされる経験とかで充たされてくると捉えています。発達要求というのは、本来子どもは好奇心に満ちあふれているもので、ワクワク・ドキドキが前頭葉の発達を刺激するとも言われていますが、そういうものに関係するものと捉えています。

虹の学園の子どもたち

虹の学園に来ている子どもたちは遊びが足りない低学年の子どもが多いです。バイオリンが弾けるとか、物理にすごく興味があつてとか、就学前にそういうものにすごく取り組んだ子どもたちです。それから徒党を組んで遊ぶ経験というのが不足していると思います。

虹の学園ではまず子どもたちにとって安心できる場所にするということ、子どもがやりたいということに没頭させるということ、楽しませるということをスタッフで共有しました。校舎内でスケボーをして遊んでいます。学校の時計がズレていたのですが、職員室の集中管理版を調整して直した子がいます。猫カフェを作りたいと言って、猫カフェを作った子どもたちもいます。やりたいことをやらせています。

自立に向けた回復の線

取り組みの中で自立に向けた段階的な回復と

いうものがあるのではないかなと思っ
ています。次に安心な場所があれば出
てくるかというのを「なぜ子どもは
学校に行くか」というもの置き換え
たときに、友達や先生がいるから学
校に行くという愛着、今勉強しないと
将来いい仕事に就けないとか進学で
できないという投資、人に迷惑をかけ
たくない、自分がこの行事を休んだら
人に迷惑かかるとかという気持ち、あ
とは学校は行くものだという規範意識
、私はこの4つのうち3つがなくなつ
たら不登校になると思っ
ています。虹の学園で元気を取り戻し
た子は2つ残ってれば学校に戻って
いくと見ています。学校に行かないけ
ど週末友達と遊んでいる子がいます。
その子が虹の学園で元気を取り戻し
て勉強しようかなと今学校に行き始
めている子がいます。虹の学園は7、
17、27の平日7が付く日は休みに
しているのですが、その日に学校に行
っている子もいます。ですから、この
うち2つでも残っていれば戻るなど思
っています。問題は戻った先が幸せな
場所かどうかということ。そこが変わ
らなければ不登校問題は解決しない
と思っ
ています。

学校との連携

学校の方には、毎月こういう取り組
みを今月やりました、この子はこれに
参加しましたというふうにもチェック
して、この教科と関係しますという
のも簡単に書いて、所見と出席報告
を送っています。これを学校がどう評
価するかです。今何人かの小学生は
今までたまっていたテストをやりに
学校に呼び出されて、週に1回テスト
を一生懸命受けている子もいます。虹
の学園に学校の先生が来て活動を見
て評価できるものを評価したり、私
が評価したものが評価に繋がって
いけば公教育の役割を果たすのでは
ないかなと思っ
ています。学校に行っていない子がテ
ストのためだけに行っ
て評価されるというの
はすごく違和感があるなと思っ
ています。

ソーシャルボンド(社会的絆理論)

最近教えてもらった言葉でソ
ーシャルボンド(社会的絆理論)とい
うのがあるのですが、「なぜ人は犯罪
を犯さないか」というのを「なぜ子
どもは学校に行くか」というものに
置き換えたときに、友達や先生が
いるから学校に行くという愛着、今
勉強しないと将来いい仕事に就け
ないとか進学できないという投資、
人に迷惑をかけたくない、自分がこ
の行事を休んだら人に迷惑かかると
かという気持ち、あとは学校は行く
ものだという規範意識、私はこの4
つのうち3つがなくなつたら不登校
になると思っ
ています。虹の学園で元気を取り戻
した子は2つ残ってれば学校に戻
っていくと見ています。学校に行か
ないけど週末友達と遊んでいる子
がいます。その子が虹の学園で元
気を取り戻して勉強しようかなと
今学校に行き始めている子がいま
す。虹の学園は7、17、27の平
日7が付く日は休みにしているの
ですが、その日に学校に行っている
子もいます。ですから、このうち
2つでも残っていれば戻るなど思
っています。問題は戻った先が幸
せな場所かどうかということ。そこ
がかわらなければ不登校問題は解
決しないと思っ
ています。

認定NPO法人岩手県青少年自立センター「ポ ランの広場」相談スタッフ 高橋淑子さん

1. 経過の概略

ポランの広場は1987年に元高校教
員の先生が「県不登校を考える父
母会」というのを創設したのが始
まりです。2001年に父母会だけ
ではということで、また居場所を
つくった方がいいねということで、
現在松尾町に「不登校・引きこも
り」に悩む子ども若者その家族を
支援する

NPO法人岩手県青少年自立支援
センター「ポランの広場」を開設
しております。



2. 子ども・若者の居場所とし てやってきたこと

(1) 2001年から2017年ころ

この時期は、火曜日・木曜日・金曜日・土曜日
の10時から16時まで開所して
おりました。10代から40代ぐ
らいの若者が来所していました。
台所兼事務所と和室風のお部屋と
2つの空間しかないのですが、こ
こに毎回10人以上、日によっては
20人ぐらいの若者が来てわいわ
い元気に活動していました。みんな
好きなことをしていました。しゃべ
ったり、ギターを弾いて歌ったり、
料理を作ったり、鞍掛山登山をや
ってバーベキューやるとか、宮古
や山田でキャンプや釣りをしたり、
本当に自分がやりたいことをや
っていました。そういう中で若者
たちが元気になるようになって
いきました。

「ポランの広場」で自己肯定感
を持てるようになってきた若者
たちが次の様々な行動に移って
いきます。3. 11の東日本大震
災のあとフードバンクでたくさ
んの食料支援が集まったもの
の作業をするとか、そういった活
動をしながら自分自身の新たな
仕事を見つけていきました。

この人たちがずっと順調に行
っているかというところを決して
そうではなくて、苦しくなったり
悩み事があったときにまた何
年かぶりにポランにやって来て
しゃべったり、そういうのが今
のポ

ランの役割になつていゝのかなと思います。
(2) 2018年から2024年

現在の開所日は火曜日・金曜日の午前10時から午後4時までが相談と居場所解放日です。土曜日の午後1時から4時までが相談、学習支援、各種体験の日という流れになっています。土曜日はパソコン学習・体験、音楽と美術体験のようなことをやっています。資金のやりくり上、盛岡市の「子ども子育て支援事業」に応募して、補助金の交付を受けることにしたので土曜日がそのような形になっています。事業実績報告をする必要があつて、それがちゃんとできていないと支援金が来ないということをやっていたのですが、やっぱり今日これですというふうになつたところに今までやってきた若者が来づらくなつてしまつたようです。若者たちは全て準備されたところに行くというよりは、自分たちで作りたいというのが大事なのかなと思つています。

こうして見てくると、ポランは学習の場というよりは自由に過ごせる自分を取り戻せる空間であるべきかなと思つています。かつてのスタッフたちがやってきた遠巻きに見守り、必要な時に支援するという仕事をこれからも続けていきたいなと思つています。最近7月に開所した気仙の「虹つこの家」というところの開所者は、スタッフの仕事として「何もしないことをする」というのがスタッフの仕事だと言つておられます。

3. 親の居場所としての父母会の役割

もうひとつの居場所として親の居場所というのが大事なな思つています。父母会の役割です。盛岡の父母会では「茶和会」という引きこもりの悩みを持つている親の会。それから「さくらんぼの会」という小中高の不登校の悩みを聴き

あう2つの会があります。私は「さくらんぼ」の方に出席しているのですが、まず、とことん話を聞く。親は子どもが不登校になつたのは育て方が悪かつたのではないかとすごい自分を責めてくるんです。その中でとことん話してもらつて、「休んでも、あなたはあなた。今はこのままでいい。」と思えることが、お母さんやお子さんにできるよになつたときに子どもは動き出すと私たちは信じて待ちます。そして自分の辛さを少しづつ吐露していくうちに親がどんどん明るくなつていく中で、子どもも一緒に食事してくれなかつたのに最近食べてくれるとか変わつてきて、中には自分で旅行の計画を立てて自分でどんどん動き出すとか、そんなエネルギーいっぱいの子どもになつていきます。

私たち父母会はそういった話を聞き出すだけではなく、何かできることをして若者を巻き込もうということ、畑作業をやってきました。畑の持ち主の方が「たとえ畝が真つすぐでなくても大丈夫、作物は確実に芽を出し育ちます。」素敵な言葉だと思つています。これはまさに子どもたちの育ちと重ねることができると思つ、私たちへの励ましの言葉だと思つて受けとめておられます。

4. 終わりに

(教員増が必要)

相談の多くがシングルマザーでした。ポランの広場に来るにも移動手段に困る。小学生だと尚更親が送って来ないと来られない。それはフリースクールもそうだと思います。結局親が仕事を辞めなければならぬ。でも横たわる学費の問題は大きい。岩手の場合、フリースクールとか支援団体は、東北本線の沿線地域にはあるけど県北とか沿岸の方はない。私はそういうこと

があつて、「できるだけ学校の先生と仲良ならうよ」と相談に来たお母さんお父さんたちに言います。「学校の中で誰か一人でもお話しできる人に自分の辛さを語ってください」と投げかけているところなんです。けれども、一人ひとりへの対応と考えたとき、今の日本の教員の数ではどうしても対応できない。学校が本当に一人ひとりに対応できるように変わるために教員の数を増やさなければと考えています。

(8050問題)

今後の課題として「8050問題」があります。「ポランの広場」では「親子で考えるこれからの生活」というのを作つたのですが、県外からたくさん注文がありまして、注文の電話を受けていると生活相談みたいになつてしまつて、そのぐら大変な問題が起きているんだと思つています。この問題でも今後も相談を受けて支援していきたいと思つているところです。

水沢子どもの居場所実行委員会

代表 大村千恵さん

1. 居場所づくりの経緯・背景

私は奥州市役所の中に席を設けていただいている青少年育成市民会議という民間団体の事務局員です。奥州市の方から青少年施策全般を委託されている立場で、そのひとつに子どもの居場所を平成11年から開設しています。

その原点は昭和56年から水沢で展開されていた寺子屋という事業です。その当時は1000人くらいの小学生に250人くらいの中高生が勉強を教えてあげたり、遊び相手をするといういろんなプログラムを作つて、お寺とか神社に夏休みに集うという事業を展開しておりました。3日間が基本なのですが、子どもたち自身が遊

びとか学びを提供しているという事業をしてま
いりました。そこがきっかけになります。

(1) 今の子どもたちの気になるところ



私は平成元年から市役所の方にお世話になっていて、その当時学校が非常に荒れておりました。当時は子どもの荒れようが姿かたちに見れていたので、そこに向き合うということができましたが、今はなかなかそれが見えてきません。そんな中で気になるところが3つ見えてきました。①他者のことにはあまり頭が回らなくて自己中心的。②他者との関係がうまく作れない。③何か困難なことにぶつかるとそこから立ち上がれない。そういう子どもたちを見ていると見るからに孤独で孤立しているなど感じました。そこを乗り越えるために独りぼっちをつくらないという展開をしようということで居場所づくりに着手したわけです。

(2) JUMPと「群」の会

当時、神戸で連続児童殺傷事件があったり、長崎でバスジャックがあったりして、14歳とか17歳問題が全国で非常に大変な騒ぎになっていた頃です。赤松文部大臣が、そういう問題を起こしている子供どもたちには抛り所がない、孤独で孤立している存在の子が多いということで居場所づくりを唱え始めた時期でした。その時期に全国の保健福祉医療事業団というところに申請をして予算を獲得して、寺子屋のリーダーの子どもたちが平成6年にJUMPというサークルを作っていたので、その子どもたちと昭和61年に子どもの育ちを支援する「群」の会が立ち上がっていましたので、この2つの団体が力を合わ

せて居場所づくりをしたという経緯です。

(3) 運営の主体は子どもたち

居場所の施設は消防署が移転した後の建物で、消防自動車が止まっていたようなのですごく汚れていました。この汚れた建物を中高生が土日の休みの日に汚れを取って、居場所をつくるというところから着手し始めました。

居場所の出身も何曜日何時に開けて何時に閉めるかなど全て中高生が考えて、その後の運営についても中高生が中心になってやってきました。子どもたちは月に1回JUMPの定例会を開いて、居場所づくりだけではなくて、県内、東北、この夏は全国にも派遣をしながら力を付けて、まちの方に還元してくれています。

(4) 大人のスタッフは空気のような存在

居場所づくりの大きな特徴は何もプログラムはありません。大人のスタッフさんに2人とか3人そこで見守っていたら、「空気のようにそこにいてください」とお願いしています。子どもたちが困ったときにはそこをちゃんと受け止めて相談に乗るとか、命にかかわるような危険があるときには回避するとか、お願いしているのはその2つくらいです。

スタッフさんの方が最初利用者が少なくなくて、「なんか行事やイベントを開いたらいいんじゃないか」という提案があったのですが、高校生の子は頑として「そういう場所はね、他にもある。ここは何もしないでのんびり、ぼけっとくつろぐ場所。そういう場所にしたい。何かしたいときは自分たちが考えて計画して進めるから」と言われたので、それからはそのようにしています。

2. 大切にしている理念

大切にしている理念は、まずはありのままを受け入れる。大人は空気のような存在。とくに私

たちの居場所では思春期の子、中高生も来ますので、その子どもたちというのは管理や指導されることを本当に嫌います。彼らが待っているのは自分のことを理解してくれる大人です。問題が起こったときに成長の時です。その時に大人が裁くのではなくて、そこに居合わせている利用者同士で考え合うということです。

3. 居場所づくりの意義

「何もないんだけど、居場所は場所じやないよね。人だよ。空間はあるけど、そこにどういう人がいるかだ。」ということを利用して子どもたちが言いました。外部からの視察の方に「どんな水沢に居場所を増やしていく予定なんですか？」と聞かれた青年がこう言いました。「できたらこんな場所なくなればいいと思います。家にいても学校にいても、どこにいてもどんなところにおいても、その子が自分自身でいられれば何もわざわざこんなところ少なくていいと思います」と。すごいその先を見通しているんですね。私もそういう精神を見習いつつ、なんとか続けていこうと思っています。

居場所に通ってくる子どもたち、課題を持っている子どもたちに一生懸命向き合うのですが、限界があります。やっぱり家庭にずっと長い時間いるわけです。そこがどういう場所かというのは子どもたちの成長に大きく影響するので、育てられている時代に育てることを学ぶというのを道のりは遠いかもしいけど、これが確実だと思って支援を続けています。家庭や地域で真に愛された子どもは自立すると思っています。

(文責：事務局)